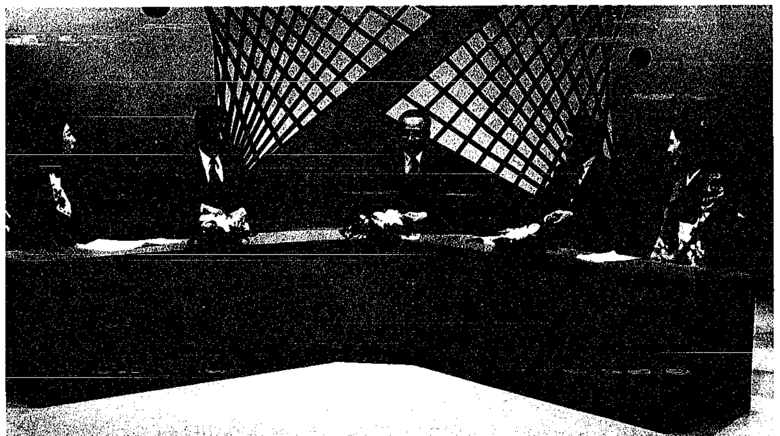
新春トーク
"夕日"に続こう　潤いのあるまちづくり

'91日本海夕日写真大賞作品



日本海夕日キャンペーンをはじめ、市民が主体となってまちをつくっていこうという動きが活発化しています。まちは市民と行政が一緒になってつくっていくことでより魅力にあふれ、生きてきます。新潟のまちを潤いあるまちにと情熱を燃やす市民と長谷川市長とで語り合いました（1月2日放映の新潟総合テレビ特別番組を要約）

司会　昨年、新潟市はウラジオストク市との姉妹都市調印など、環日本海圏の拠点都市として大きく飛躍しました。一方、私たち市民にとりましては、まちは住みやすい、暮らしやすいところであってほしいという願いがいつもあるわけなんですが、きょうは潤いあるまちづくりについて皆さんと共に考えていきたいと思います。まず長谷川市長から今年はこんなまちづくりをと思っていらっしゃることをお話し願いたいと思いますが。

市長　今年はまた、いろいろなことを手がけていかなければいけないと思いますけれど、まちが明るく楽しくなるには、やはり市民の皆さんが連帯の意識をもって、まちづくりをしていくという、そういう気持ちが大事だと思いますね。そんな意味で市民の皆さんが主体になったまちづくりも応援していきたいなと思っています。

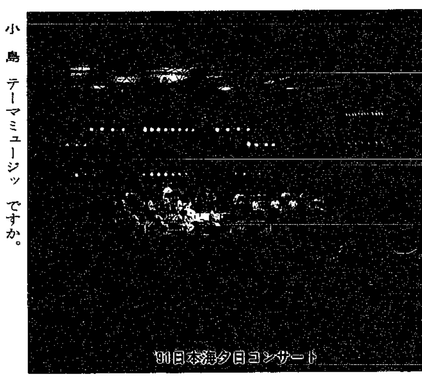
市民がつくった夕日コンサート

司会　市民が主体となったというお話が出たわけなんですけれど、その市民が主体というところをとりますと、やはり「日本海夕日コンサート」ということになるんですけれど、もう今ではかなり浸透しましたね。

樋口　そうですね。去年でまる六年ですから。月並みな言葉ですけれど、長いといえば長いし、短かったといえば短かったという。

小島　ずっと同じようなペースで伸びてきたんですか。あのコンサートの規模というのは。

樋口　年々少しずつというのかな、ある年だけ、市制百周年の年だけは、ものすごく夢を膨らませて、それに向かって突っ走りましたから、とんでもなく大きくさせてもらいましたけれど。


'91日本海夕日コンサート

小島　テーマミュージックなどができたのは、その年ですか。

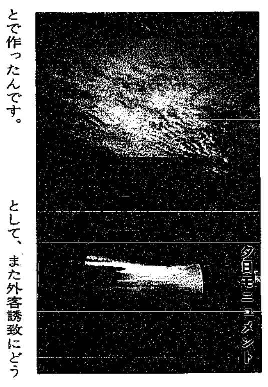
樋口　市制百周年の年に、やはりいろいろな方々から夕日コンサートに参加してもらいたいということで、市民合唱団を編成したんですね。夕日を歌うということで。そこで歌ってもらうにはどんな歌がいいのかな、じゃあテーマ曲を作ろうということで作ったんです。

夕日を歌う新潟市民合唱団

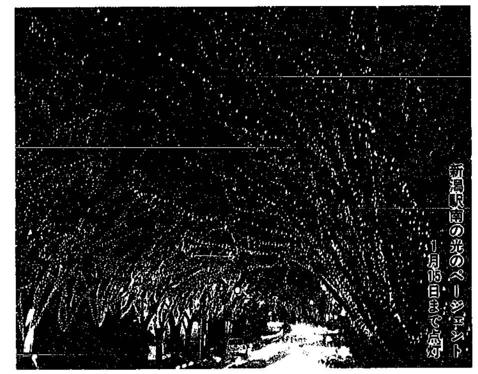
司会　とてもいいきっかけになりましたよね。

市長　コンサートだけじゃなくて、ほかにもいろいろな事業を合わせて行われるようになりましたね。

樋口　初年度と二年目はコンサートのほかに夕日ですとか日本海を市民の憩いの場として、また外客誘致にどうやって役立たせていったらいいのかという、アイデアを募集したんですね。ですからその後の事業展開の中でそのアイデアを生かしているというのがあるわけです。写真展やフォーラムを開催したり、夕日のモニュメントもつくりました。


夕日モニュメント

身近な発想から　まちづくりが

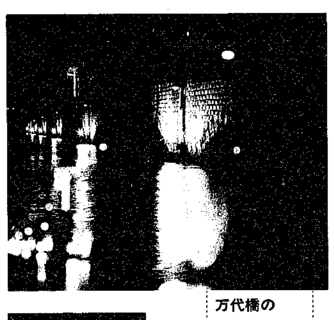

新潟駅南の光のページェント　1月15日まで点灯

司会　夕日キャンペーンはどんなことからはじめられたのですか。

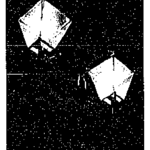
樋口　観光による地域活性化をねらって旅館組合の仲間で手探りに近い状態ではじめたわけなんですが、我々が最初のきっかけ、とっかかりの提案はやらさせていただいて、個人的に参加してくださった方が何人かいて、旅館の仲間と一緒にやってきたといいますかね。

宮田　私のところは四年前になりますけれど始めた時には、けやき通り四季折々良さはあるんだけれど、なかなか冬になると真っ暗でまったく寂しいちょっと明るくしたいなという、ほんのそんな発想から、お隣近所に声かけたところ、それはいいことだ、一緒にやろうじゃないかということで、そんな仲間ができたということですね。樋口さんと違うのは旅館組合などの組織が全くなかったことですね。

司会　かなり大変だったと思うんですけれど。身近なところから手をつけたという、そのイベントというものが二つ出てきたわけなんですけれど。


万代橋の夜間照明

市長　少し前になりますけれど、万代橋に照明をつける運動がございましたね。あれがもう新潟の名物になりました。今は市が引き継いで管理をして、夏と冬は少し色を変えたりして、万代橋の照明を続けています。こんなことも市民の皆さんからの発想で、盛り上がってきましたし、今度は駅前からガス燈をつける運動が始まりましたよね。あれなんかもまちをとても素晴らしく美しくしていただいていると思います。やはり市民の皆さんが発想をして、活動をしはじめて、そして行政も後押しをして一緒にやっていくという、こういう地域の連帯のあるまちづくりというのがね、私はとても大事なことだなと思いますね。


新潟駅前のガス燈

新潟らしさを大切に

司会　まちづくりに市民が動くには、身近な生活に根ざした何かの方向性みたいなものがあると思うんですが。

樋口　やはり新潟らしさだと思いますね。新潟らしさというのは、それぞれいろいろな「らしさ」を感じていらっしゃる方がいると思うんですね。風景でいえば信濃川だったり、鳥屋野潟だったり、日本海だったり、我々はその中で一番新潟らしい風景として、日本海、特に夕日が沈む時の日本海を選んだということですね。

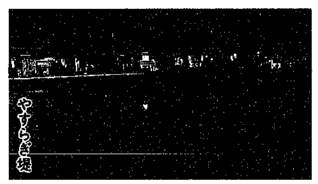
司会　これは自然なんですけれど、新潟の歴史的遺産みたいなものもありますよね。そういった部分に焦点をあてますと。

小島　私はふうどスタイリストと申しまして、食素材とか、料理をそれにプラスする付加価値、フード性とか物語性、歴史性を持たせてイメージアップして発信しています。そういうこだわりを持った場合にだれでも市民というのは、ある程度新潟らしさを自分なりに一生懸命把握できるものじゃないかと、このごろ思っています。さっき夕日とおっしゃいましたけれど、本当に路地の一角でも新潟らしさはふっとあるんで、それはその一人ひとりがまちに愛をもってこだわりを持てば見つけられることなんじゃないかと思っています。ですから、なるべくそういうこだわりのある人を増やしていけたら、何というのか、そうしたら当然ながらいいまちになるだろうと。

私は古町が一番例に取りやすいので申しあげるんですけれど、あれを何で横に切ってしまうのか、縦にぜひ流して生かして欲しいと思っているんです。古町を一番町から十三番町まで歩いてみていただくと新潟の港町の歴史、変遷を旅することができます。帰りは信濃川の川原を歩いていただく、そうするとあのやすらぎ堤が逆に生きてくる。狭い商店街にこだわらずにその周辺も含んだ付加価値をみいだす。特に古さ、歴史を付加価値に転換する、そういうまちづくりをみんながこだわりをもっていけたらという気がします。

古町通13番町

市長　新潟のまちに来られた方々が、もちろん住んでいる方々もそうですけれど、これこそ新潟らしいまちだというふうに楽しみながらあるいは誇りをもってね、自分たちがまちづくりをしていると言えるような空間をつくっていくということだと思うんですね。それは必ずしも古いものを残すことだけではないと思います。やっぱり新しい魅力をつけていくということも大事だと思うんですが、古いものを残すという意味で言えば、下町の方にあります郷土資料館、あるいは県政記念館とかですね。代表的な古い建物と、その周辺を新潟の懐かしい情緒のあるような雰囲気につくっていくということが一つあると思います。そういった新潟らしさの演出というのは、これからいたるところに工夫をしていきたいなと思いますけれど、やはり堀と柳というようなイメージでありますとか、あるいは早苗が風になびいているような稲穂の原風景とか、いろいろなものが新潟の特色としてありますね。その中で信濃川、阿賀野川、あるいは鳥屋野潟という、水と緑というものはやはり新潟の一つの大きな特色になっているんじゃないかなと、そんな感じがいたします。


やすらぎ堤

郷土資料館

司会　市長は、都市の中の緑というものもかなり提言なさっていますが。

市長　ヨーロッパの都市に行きますとよくベランダとか窓に植木鉢を置いて綺麗な花を飾っている店があったりしますね。それが何軒も続いていたりしますけれど、ああいう一戸一戸がそういう環境というものについて、自分なりの努力をしていただく、それがまたとてもまちの雰囲気を和らげたり美しくしてくれたりするという、そういうことも、私は非常に価値のあることだなと思います。それと私の原風景という観点からいきますと、やはり堀と柳というのは忘れられない情景なんですね。ですから、できるだけ復元できるところは復元していった方がいいかなと思いますね。

司会　そうですね。原風景の思いを呼び起こすことによって、市民というものも気持ちがまた変わってくるかと思うんですけれど、夕日キャンペーンを行ったことによって、市民が新潟の夕日って綺麗だったんだなということを気づかれた、そういうような感触というのはおありになりますか。

樋口　それはすごい手応えですよね。最初の夕日コンサートの年が四千人、去年は六万人くらいの方々においでいただいていて、あれはコンサートを楽しみたいという気持ちもあるでしょうけれど、やはりあそこの砂浜と夕日というのがあってはじめてあのコンサート、服部先生（作曲家の服部克久さん）なんかも毎年おっしゃっていらっしゃる、一番のゲストは夕日ですよと。

小島　盲点でしたよね。当然あって当たり前のところを、だれも、みんな見ていたんですよね。小さい時から。本当に見ていて、だれも考えなかった。

司会　そうしますと、やはり美しさ、ハッと気づいた、それがまた町おこしのいいきっかけになってくると思うんですけれどね。

宮田　私の場合たまたまイルミネーションであったかも知れませんけれど、これはたまたまのことで、市のあちらこちらでイルミネーションということだけじゃなくて、いろいろなことが起きていいんじゃないかと、それが本当に活気あるまちというか、そんなことにもつながってくるのかなと思います。特に冬の場合というのは、新潟はどうも暗く寂しいというイメージがあるので、こういうものを本当にもっと明るいムードに、アピールできるようなものも多く出てくればいいと思っていますけれどね。

連帯心を基本に

司会　小島さんにも、私がさきほどお話をうかがいたいなと思ったことに、古町の通りを、なんとかモールミュージアムみたいなものをつくれないかといったことを、私は以前ちょっと資料で読ませていただいた部分があったんですけれど。

小島　いつ行っても何かがある。それも身近な人たちの何かがあるというのはすてきなことだと思ったんです。だから、モールミュージアムをつくって市民も意外と新潟はそういう場所が少ないから、どんどん発表して歩きながら素晴らしいものを見れるまち、それはすてきなモールになると思うんです。シャッターが閉まっていた時でも、それは一つの絵になるというような。モールはたくさんあるけれど、ちょっと変わったモールになさった方がいいと思います。そのためには、やはりみんなの連帯が必要だと思うのですが。

宮田　光のページェントをはじめるまではお隣近所も、全く分からない、朝、顔を合わせてもあいさつもできないような状態だったのが、それをきっかけにグルグル回るようになりまして、皆さんとも顔を合わせてもあいさつできますし、それ自体ぼくは一番今回やってよかったことだったなと思っています。それに、意外だったと言うと失礼なんですが、声かけたらほんとうに皆さん多くの方がそれはいいことだということで、一緒にやってくれたというのは、本当にやってみなければわからなかったことでありましたね。

古町モール

市長　そうですね。まち並みを作っていくにはやはり連帯が必要ですよね。人々が連帯する心を持つということが基本だと思います。そしてその中から例えばまちの中にごみをなくそうとか、あるいは高齢者に対する思いやりの気持ちを育てていこうとか、いろいろなことが始まってくるんだと思いますね。

大きな夢かなえよう

司会　そうですね。あっという間に時間が過ぎてしまいましたけれど、今日は新年ということですので、ぜひ皆さんに将来の大きな夢を伺って終わりにしたいと思うんですけれど。

小島　職業柄、新潟の食文化は本当に、京都の技巧とか工夫でできた食文化とまるで違う、日本の食の双璧をなす可能性を持っている食文化だと思います。ですから私は、ぜひ新潟は大事にした方がいいと思います。この今の食のあり方を。そしてその食を夢見ていらした方に、やはりそれを味わうらしい町で、何としても食べていただきたいと思うので、地元に根差した食が世界に羽ばたくよう、私はそれが夢です。

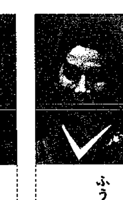
宮田　私は今度はイルミネーションとは全然違うんですけれど、これから高齢化社会と言われている中で、どえらいことをやろうという気持ちは全然なくて、一市民としましてやっぱりお年寄りというのはこういう姿で暮らせたらいいなという夢の部分なんです。そのためには、どういうふうにして生きがいをもって楽しく暮らすことができるのかな、そういう施設をつくるのが夢でありまして、これは何年先になるかわかりませんけれど、そんな話を一人二人としていくうちに、それはいいねということで、今も何人かの方が集まって、たまにそんな話をするようになれたんですけれど。これもぼくは言わなければだれも集まってもくれないんでしょうし、言ったからそうやって集まってもいただいて、それがやっぱり広がっていけば、これもまた夢でもなくなるのかななんていうのが、今そんな途中の段階なんですけれどね。ぜひそんなお年寄りの方が楽しく暮らせる施設というか、そういうものをぜひつくっていきたいと、これもぜひ市の方とか、県の方とかそういう行政ともつながっていかないとだめなことだと思いますけれどね。

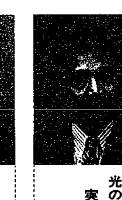
司会　樋口さんは。

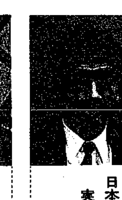
樋口　夕日キャンペーンのそもそものきっかけというのは、一言で言いますと観光による都市の活性化ということなので、去年の秋に観光キャラバンも業界から参加させていただきましたし、大会会議誘致のセールスにも行ってまいりました。夕日キャンペーン実行委員会の委員としてまたそういう業界にかかわる人間として日本海、海辺に新潟のまちの顔、英語でランドマークというんですが、新潟のまちの顔になるような全天候型のそういう施設をつくってもらいたい。そこで例えば夕日を見ながらパーティが開かれたり、大会会議の後に星空を見ながら懇親会が開かれたりとか、そういう施設をつくってもらいたいというのが僕の夢ですね。つくりたいというのかな、一緒にみんなと。

市長　皆さんからとてもいい点を指摘していただいているなと思いますけれど、国際化が進めば進むほど、新潟って何なんだという自分を見つめることが必要になってきますね。その意味で新潟の文化というものをいろいろ特色のあるものに、そして高い水準のものに高めていく、そういう努力をしていかなければいけないなと思います。宮田さんからお話のあった高齢化問題というのは、全市をあげて取り組んでいかなければならない問題だと思います。やはり安心して年をとれるという仕組みをつくっていくことが必要だと思います。きょうは新春にふさわしい大きな話がたくさんあったと思います。

話し手


ふうどスタイリスト　小島富美子さん


光のページェント実行委員長　富田達雄さん


日本海夕日キャンペーン実行委員会代表　樋口潤一さん

新潟市長　長谷川義明

司会　棚橋美稚誉さん（新潟総合テレビアナウンサー）